

十五社の楠

和歌山県伊都郡かつらぎ町笠田東

私は、12329人の 卒業生を見守ってきた。



1

「おはよう」。子どもたちが校庭を歩いていく。今日もあの子たちが一番のりだ。3階のいつもの教室がさわめきはじめ、風が元気な子どもたちの笑い声を運んでくる。澄んだ空気の中で朝日を浴びながら深呼吸したのは、もう2時間以上も前になる。小鳥がさえずりあたりがすっかり明るくなると、近所の人たちが落葉を掃き集め軽トラで運んでいった。近くの柿園が桃園にまくのだから。仲良し中学生が自転車で過ぎ去っていく。いつもと同じ時間だ。この春、笠田小学校を卒業した彼女たちは、学校帰りにいつも私の足下で仲良く話し込んでいる。

子どもたちの成長は、とてもとても早い。私は400年以上ともいわれる間、生きていた。まだ人の背丈ほどだった昔、周辺には99軒の家が建っていた。大忙しの鍛冶屋と大工は村人の暮らしを支える大切な職人で、なんと寺は9つもあった。その一つ妙楽寺の境内に私はずっと立っている。本堂がひとつだけの今の様子からは想像できないだろうが、かつての妙楽寺には、薬師堂、大日堂と、15神を祀る十五社明神が鎮座し、その傍らで育った私は、いつしか「十五社明神の楠」と呼ばれるようになった。維新政府の神仏習合廃止で神仏分離が徹底された明治元年に、十五社明神は廃止された。妙楽寺の境内の寺子屋で「読み書き、そろばん」を熱心に学ぶ子どもたちの姿があったのも、ちょうどこの頃だ。妙楽寺を校舎にして明倫小学



2

校が8年後に開校し、40人に満たない子どもたちが真剣な眼差しで勉強に励む姿は、私にとってそんなに遠い昔の記憶ではない。

今日最初のチャイムが鳴り響き、ほとんどの子どもたちは登校を終え教室で談笑している。「静かにしてください」とプリントを配る女の子の音が聞こえてくるが、言う事を聞かない男の子が数人いるようだ。女の子の言葉も次第にきつくなる。遊びに夢中の元気な子どもたちは、昔も大勢いたものだ。昭和の初めには、私の自慢だった大枝の下に土俵が設けられ、さながら男子学生の力比べの場となった。先生の声がいつも響き、それに応えるように高等科の学生たちは一生懸命に練習をしたものだ。ある時、優勝旗を携えた勇猛果敢な学生を、拍手喝采で迎えたこともある。上級生に投げ飛ばされていった子どもが、いつしかうはな体格になり、対抗試合でよい成績を残して帰ってくる。こんなに身近に、毎日毎日子ども

たちをみているせいか、私もうれしくて小躍りしたくなるほどだ。子どもたちも私を身近に感じていたようで、昭和26年に作られた佐藤春夫作詞の校歌には、当時の様子が盛り込まれている。

大樹の樟よ わが庭よ
ちとせの命 貴しと
十五社の森の 下かげは
至誠の児童 集うなり

と、校歌の歌詞そのままの光景が日常となった。それから5年後、私の下には、滑り台、ブランコ、シーソーが新たに設置され、子どもたちの歓声は私に日々の喜びを与えてくれた。

事件が起きた。過去最大級と呼ばれる第2室戸台風が直撃。私の自慢の枝が強風でへし折られ、民家に被害を出してしまつた。朝になつて気がつくとき小学校でも被害を受け、建物の天井が落ちたり傾いたりしたようだ。折れた私の処分について、人々の話し合いは夜遅くまで続いた。その時、折れた枝だけを切り落とし、私ごと切り倒されなかつたおかげで、私は今も生き続けている。のちに校舎の移転立て替へにもない、子どもたちの安全を考えて太い枝が数本切り落とされたが、私も納得承知。私が見守っている子どもたちに私自身が被害を及ぼすのだけは、絶対に避けたいから。

先生が廊下を足早に歩き、教壇に立つ。「おはようございます」と子どもたちの大きな声が響き、授業が始まつた。2002年春、笠田小学校の卒業生は12329人を数えた。

- 1. 今も傍らに残る妙楽寺の本堂。
- 2. 始業前の笠田小学校。子どもたちの歓声を聞きながら十五社の楠は大きくなった。
- 3. 笠田小学校の校舎より高い十五社の楠。国道からも見ることができる。

参考資料 かつらぎ町史(近世資料編)/広報かつらぎ/笠田公民館報/笠田小学校創立百周年記念誌くすのき



3

【十五社の楠】
1958年4月1日に和歌山県の天然記念物に指定。1990年に実施された環境庁(現環境省)の巨樹・巨木の調査によると、幹周13.4m、樹高20m、枝張り25mで、全国では第43番目、近畿地方では一番大きな樹木とされている。周辺環境の変化のためか、樹勢が衰えを見せはじめた1998年に、世話役の薬師講のみさんと地域の方々の尽力で樹木医の治療を施し、現在は力強さを取り戻している。説明板には、樹齢400年以上とあるが、樹木医の診断では600年を超えているという。地元住民の呼びかけに、「十五社の楠を守る会」が発足され周辺の清掃と管理、樹木の診断、啓蒙活動などをとりまとめている。かつらぎ町のシンボルとして敬愛されながら、強たくたくましく、いつまでも生き続けることをすべての住民が望んでいる。

真下に立つと森の中にいるような錯覚に陥ることから、「十五社の森」とも形容されている。